

異世界轉生驅動記

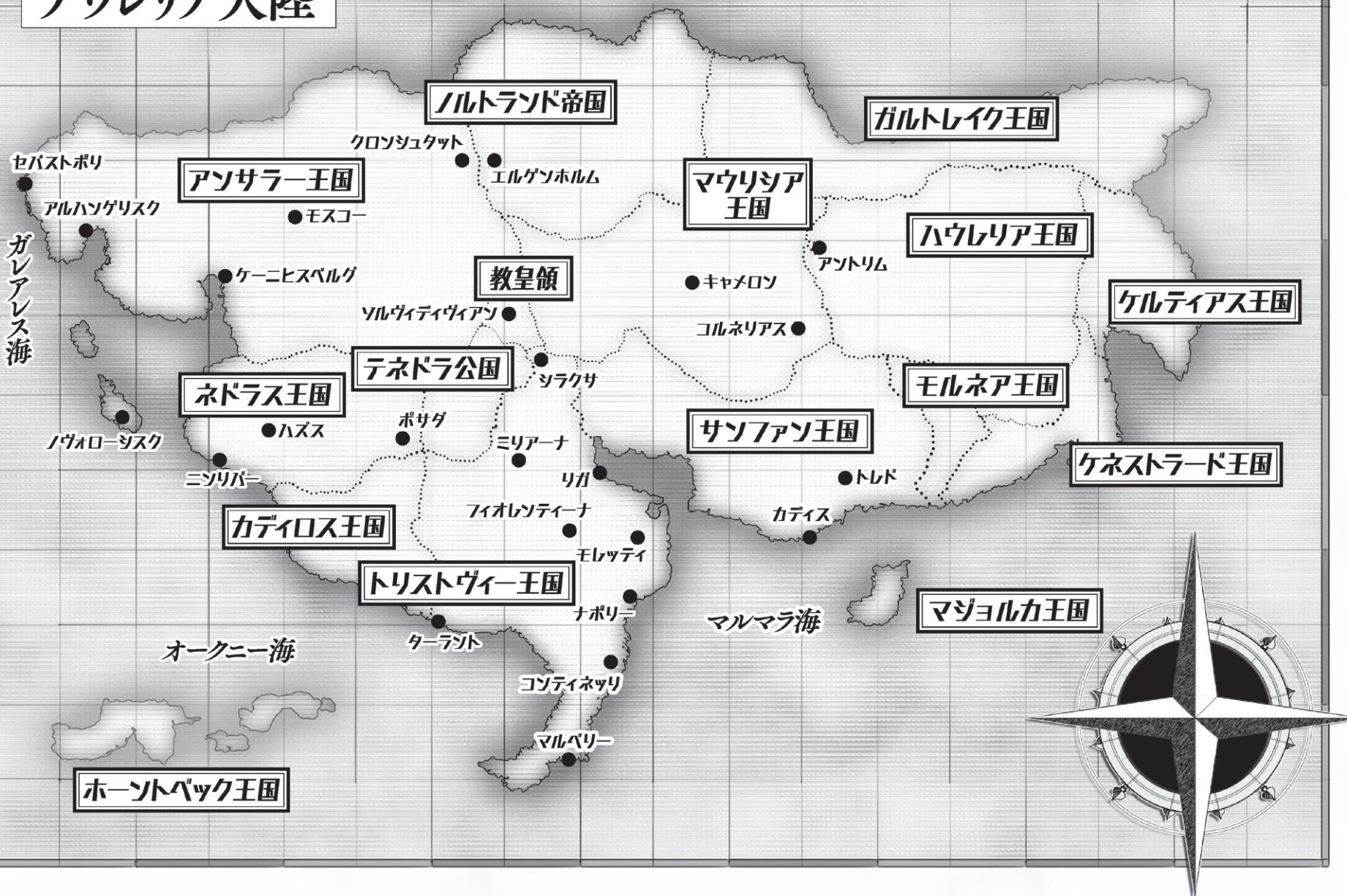
高見梁川

Takami Ryousen

ILLUSTRATION: りりんら

14

アウレリア大陸



アレクセイ三世

アンサー王国の国王。
アウレリア大陸一の権力者。

マサキ・クジョウ

ガルトレイク王国の武人。
北方戦線の援軍に派遣される。

サツキ・カゲツ

猫耳族の巫女姫。
ガルトレイク王国では
知らぬ者がいない戦士。

ウラカ・
デ・バルマ

マジョルカ王国の海軍卿。
ネグロトルメンタ
「漆黒の暴風」の
異名を持つ。

オデュッセウス・
アルトリアス

ホントベック王国の海軍卿。
艦隊の指揮能力に秀でる。

エルンスト・バルトマン

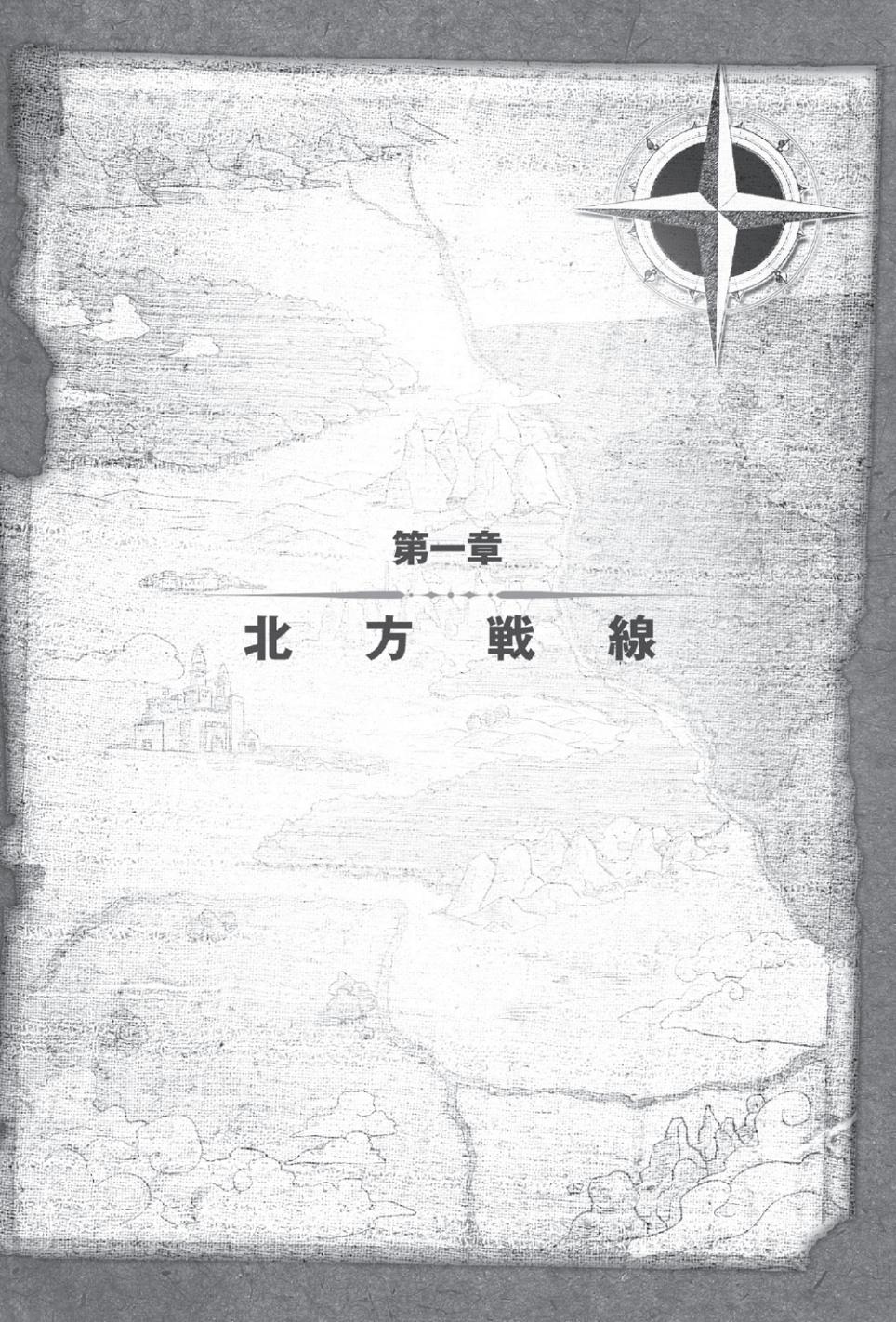
ノルトランド帝国の近衛騎士。
優れた武人でセリーナの幼なじみ。

ラミリーズ

新生トリストヴィー王国の大将軍。
数々の戦場で武勲を挙げた。

バルド・
トリストヴィー

本編の主人公。
雅晴と左内の魂を有する。
獣人の血とトリストヴィー
王家の血を引く。



《その他の登場人物》

岡左内おか さない バルドの前々世。守銭奴の戦国武将。
岡雅晴おかまさはる バルドの前世。現代日本の高校生。

シルク 新生トリリストヴィー王国の王妃。
セイルーン バルドの側室。幼なじみの侍女。
セリーナ バルドの側室。犬耳族。根っからの商人。
レイチェル バルドの側室。元はマウリシア王国の第二王女。
アガサ バルドの側室。領地経営を任されるほどの才女。

イグニス・コルネリアス バルドの父。武勇に名高い辺境貴族。
マゴット・コルネリアス バルドの母。最強の傭兵。
ナイジェル バルドの弟。マルグリットとは双子。
マルグリット バルドの妹。ナイジェルとは双子。

テュロス バルドの幼なじみで、その補佐を務める。
アウグスト・ガリバルディ 新生トリリストヴィー王国の宰相。

カイラス 多くの海賊を束ねてきた大頭目。ウラカの片腕となる。
ホセ・リベリアーノ サンファン王国の軍務卿。知略に富む。

ジーナ・ビヨルク マゴットの祖母。獣人族の軍神。
ギツツエ・マンネルハイム ノルトランド帝国軍の騎兵総監。
アーロン ノルトランド帝国軍の国境防衛司令官。

サクヤ・カゲツ サツキの母。ガルトレイク王国の巫女頭。

エウスタキウス・ホントベック ホントベック王国の王太子。

ボリス・ロドノフ アンサー王国ノルトランド方面軍司令官。
イサーク・バルベルグ アンサー王国トリリストヴィー方面軍司令官。

マキャベリ エウロパ教団派遣軍の兵团長。

パーシバル アンサー王国遊撃艦隊の司令官。
ドミトリー アンサー王国遊撃艦隊、旗艦の艦長。

ネド拉斯王国_{かんらく}陥落_{かんらく}——。

しかも、バルド率いる新生トリストヴィー王国の侵攻から陥落までの間はわずか数週間。一国の滅亡に要した時間としてはおそらく最短であろう。

バルドと敵対するアンサラー王国やエウロパ教団だけでなく、隣国テネド拉斯公国が受けた衝撃も大きかった。ネド拉斯王国と同じように、アンサラー王家の血を引く大公が即位して属国化したテネド拉斯公国は、まさしく次は自分たちの番だと考えたのである。

「明日にもトリストヴィー王国が攻め込んでくるぞ！」

そんな空氣_{くうき}が充満し、貴族や民衆はパニックに陥_{おち}つた。

誰より驚愕_{きょうがく}したのはテネドラ公国大公、ベンリアック・テネドラである。

「……アンサラー王国は、本当にネド拉斯王国を守る気があつたのか？」

大公はその点を危惧_{きぐ}していた。

ネド拉斯王国の危機に際して、アンサラー王国側の対応が過小だつたように思えたのだ。

教団の支援もあつたとはいえ、アンサラー王国の国力を考えれば、もつと兵力を出せたのではな

いか。

それは取りも直さず、アンサラー王国がどれだけテネドラ公国を助ける気があるか、という疑問

に直結していた。

「——あなた」

普段は気高く侵しがたい雰圍氣をまとつてゐる妻——アンサラー国王アレクセイの娘でもある——も、この成り行きに不安を隠せないらしい。

不安なのはこつちのほうだ、と大公は言いたかつたが、プライドが高い以外に取り立てて欠点のない妻に八つ当たりするのも憚_{はばか}られた。

「義父上は我が国を見捨てずにいてくれるだろうか……」

「当たり前ですわ！ 今ここでテネドラ公国を見捨てれば、アンサラー王国の威信は地に落ちます！」

ネド拉斯王国が陥落したことで、二大勢力の天秤_{てんびん}はバルド率いる同盟諸国へとやや傾いた。

対するアンサラー王国を頂点とした枢軸_{すいじく}国は、テネドラ公国を失えば一気に信用をなくすだろう。中立の国々は雪崩_{なだれ}を打つて同盟諸国へ寝返り、教団とアンサラー王国だけではほぼ全世界を相手にすることになる。

それでも相手にできてしまふところがアンサラー王国の恐ろしいところだが、さすがにジリ貧は避けられまい。

「あなたは父上を裏切りませんわよね？」

すでにネド拉斯王国はバルドの軍門に下り、独立_{ほうき}を放棄したに近い状態だという。

王国軍司令官に獣人族であるラグニタスが就任したものの、宰相や高級官僚には変わらず人間が登用されたことで、国民の不安は大幅に軽減されていた。

加えて、トリリストヴィー王国からの人道支援も功を奏した。アンサラー王国に搾取されるばかりであつたネドラス王国の国民は、目を疑つたという。

少なくとも占領の初期段階において、バルドは所定の成果を収めた。

こうした治安の安定がないと、ただでさえ少ない兵力を治安維持に吸い取られ、決戦兵力が不足する本末転倒な事態になる。

古来より征服地が肥大化した大帝国が衰亡していくのは、この戦力の希薄化にうまく対応できないためだ。

大英帝国がわずかな人口で世界帝国を維持することができたのは、この占領維持の技巧がすば抜けていたからに尽きる。伊達にブリカスと呼ばれてはいないのである。

「無論、我が国はアンサラー王国とともにある。ただし、アンサラー王国の考えが異なるのなら、そのかぎりではない」

つまり具体的な支援と対策を求める。ネドラス王国と違つて獣人の反乱など起きていないテネドラ公国には、同盟諸国に対抗できる軍事力が存在しないのだから。

「——アンサラー王国が守ってくれないとなれば、もはや降伏するしかなくなる。その点を義父上によく伝えてくれ」

ところが、公国内は一枚岩ではなかつた。

ネドラス王国ほどではないにしろ、テネドラ公国もアンサラー王国に搾取される属国であり、その立場から解放されたいと思う勢力が存在した。

当然ながら、彼らはトリリストヴィー王国に対し、テネドラ公国侵攻の際には協力することを申し出たのである。

「——情報を取りこしろ。内密にな」

情報を独断で公国側へ漏洩させたのは、宰相アウグストであった。

父ヴァレリーから受け継いだ諜報組織、そしてダウディンググループと連携した巨大な情報網を掌握しているのは、実はバルドでなくアウグストである。

そうして収集された情報を厳選し、必要な分だけをバルドに届ける。そうでなければあまりに膨

大な情報量によって、バルドの時間が不必要に割かれてしまうからだ。

これは、並大抵の信頼関係でできることではなかつた。アウグストがその気になれば、情報を操

作してバルドを死地へと追いやることすら可能なのである。

だからといって、二人が厚い友情で結ばれているかといえばそうでもない。

「女たらしはもげてしまえばよいのです」
「尻に敷かれているからといって、僻むなよ……」

この二人、どちらかといえば、プライベートではいがみ合うことのほうが多い多かった。

のちの歴史書に、「どうしてこれほど相性の悪い二人が、史上最高の国王と宰相となつたのかは謎である」と決まり文句のように書かれるとは、さすがの二人もあざかり知らぬ話であった。

アウグスト——正確には彼の有する諜報部隊によつて、臣下の裏切りを知らされたベンリアック大公は恐怖した。

ネド拉斯王国のヴァシリー公爵のように、自分も殺されるのではないか？ そう考えるだけで居ても立つてもいられなかつた。

恐怖する者が選択する手段は大抵ふたつ。逃げるか、より強い恐怖で抑えつけるか、だ。

「——皆殺しにせよ。一人たりとも生かしておくな」

疑心暗鬼に囚われたベンリアック大公は、同盟諸国に協力を申し出た国民や貴族を家族もろとも処刑した。

その結果、一時は鎮静化したものの、アンサラー王国から派遣されてきた軍がテネドラ公国の物資を食いつぶし始めると、再び反抗の火が燃え上がる。

ましてや、降伏したネド拉斯王国がトリリストヴィー王国からの物資援助で潤つてゐるのだから、なおのことであつた。

公国も必死で情報を統制しようとしたが、国境を接する隣国の情報を完全に防ぐことはできない。しかもダウディンググループの影響下にある商会が、せつせと情報を広めているのだ。

「まあ、そろそろでしようかね」

アウグストが酷薄な笑みを浮かべたころ、テネドラ公国では貴族たちが中心となつてクーデターを画策し始めていた。

——それはなぜか？

アンサラー王国の属国であるテネドラ公国は、これまで必須物資である塩を、そして通貨の製造に必要な金を、アンサラー王国から輸入することを強いられてきた。

もちろんトリリストヴィー王国と国境を接する一部地域では密売も横行していたが、基本的に国家が専売することに関して、貴族も国民も反対することはできなかつた。

その結果、ツケを払わされるのは国民である。ごく少数の上層部がさらに代金を上乗せしているから始末におえない。

果たしてそこに、別ルートによる安価で大量な供給をちらつかせねばどうなるだろうか？ しかもこれまで、旨味にありつけなかつた者たちの前に、である。

国民を貧困から救うため——大義名分としては十分すぎる。彼らがトリリストヴィー王国へと軸足を移すのは当然の結果であった。

「物資と情報は協力してやりなさい。別に、バレつぶされても問題はありません。混乱が拡大すれば我が国の利益になります」

アウグストは部下のタリスカに命じると、天を仰いで嘆息した。

「……まったく、このところ父と同じことばかりしているな」

「恐れながら、似て非なるもの、と言うべきですな」

ヴァレリーから託された諜報部隊の長おさであるタリスカは、感慨深げに笑う。

アウグストには、ヴァレリーのような見ていてつらくなる悲壮さがない。

陽のあるところに影がある。しかし陽のない世界では、影は影でなく、無限大の闇と化す。

その闇のなかで影である意志を貫くのに、ヴァレリーがどれほどの執念と怨念おねんを必要としたか。影であることを使命とするタリスカだからこそ、闇に呑まれず影であり続けたヴァレリーの意志

力が、いかに規格外なものだったかがわかる。

だがアウグストにその心配はなかつた。なぜなら彼にはバルドという太陽がいる。だからこそ安心して影に徹することができるのだ。

(まあ、二人とも絶対に認めないだろ、うから言わんが)

「……いやな目ですね。手のひらの上で踊る私を、父が眺めていた目を思い出しますよ」

「滅相もない」

うつかり感情を表に出しすぎていたようだ。アウグストの冷たい視線を浴びて、タリスカは背中にいやな汗をかいた。

「それにしてもよろしいので？ その気になれば、クーデターを成功させることもできますが？」

「クーデターに成功した連中が、全力ですがりついてくるほうが厄介です。あの国にはラグニタス

殿のようだ、我が國の意を汲んで行動してくれる人材はいないのですから」

せいぜいしばらく混乱してくれればよい。恩を売りつける最高のタイミングで、最高値をふんだくつてやる。

(ああ、楽しそうに悪だくみするときのそういう表情、先代ヴァレリー様そつくりですよ)

「——何か？」

「いえいえ、それではただちに手はずを整えますので」



「ふふふふふふふふ」

「うにやにやにやにや」

ネド拉斯王国侵攻と陥落をもつとも喜んだのは、ウラカとサツキであつたかもしれない。

海を隔てた異国でバルドと二人つきり、いや、三人つきり。ここには邪魔なシルクも、最近腹黒さを増しつつあるセリーナとレイチエルもいないのである。

帰国までの時間、バルドとの甘いアバンチュールを期待するのも無理はなかつた。

「恨みつこなしにや」

「はん！ 眇え面かかせてやるよ！」

「猫耳族は犬耳みたいに眇えないのにや！」

二人の乙女たちが期せずして不敵に嗤い合う。

それはかつてのシルクとウラカの戦いの再現であった。男を懸けた、乙女のプライドとプライドのぶつかり合いである。

しかしさすがのウラカも、王門を相手にするのはあまりに分が悪いと言わざるを得ない。

あるいはここが海であれば、勝負の行方もわからなかつたであろう。海をゆりかごとして育つてきたウラカは、足元が安定しない船上での戦いに慣れている。

「安心するにや。痛いとも感じないうちにおねんねさせてやるにや」

「大丈夫かい？ お子様はおねんねの時間だよ？」

「誰がお子様にや！ ……ぐう」

まるで人形の糸が切れたように、サツキはくたりと前のめりに倒れ、安らかな寝息を立て始めた。

「どうやら眠り薬が効いたようだね」

ウラカはしてやつたりと、うつぶせに倒れたままのサツキを見て嗤う。

実は最初から、サツキのワインに眠り薬を仕込んでおいたのである。わざわざ海の彼方かなたの南方大陸から取り寄せた、効果抜群の睡眠薬であつた。

「ふつふつふつ……バルド、今夜は朝まで寝かせないよ？」





意気揚々とバルドの寝室を訪れたウラカは、この日のために用意した、サンファン王国の王妃マリア直伝の真っ赤なシユミーズを身に着けている。

この時点で、どうしていまだにマリアを信じているのか、ウラカの常識を疑つた人間は正しい。

あのマリアが、まつとうなアドバイスを素直に教えるはずがなかつた。

「バルド～～、あなたのウラカが来たわよ？」

「……」

「あれ？ 寝てる？ バルドのワインには睡眠薬は入れてないはずだけど……」

睡眠薬ではない別の何かは入れたけれど。

なんでも、マリアが手づから作つてくれた強精薬だという。
今夜は孕むくらいバルドに頑張つてもらおう、と思つて飲ませたはずなのに。
「……もう辛抱たまらあああん！」

「きやつ！」

「ふしゅー、ふしゅー」

「ど、どうしたのバルド？ なんだか怖い」

「晩にワイン飲んでから滾るリビドーが抑えられーん！」

「や、やられた……強精薬なんかじゃない、発情薬だ」

あらあら、うふふ……と、楽しそうなマリアの笑顔がウラカの脳裏をよぎつた。

「で、でもそれはそれで……」

「覚悟しろよウラカ！」

もともとバルドの寝込みを襲い、愛し合う覚悟は出来てゐる。むしろバルドがヤル気なのは歓迎すべきことだ。

しかしそのウラカの覚悟は、暴走した王門持ちの体力を完全に見損なつていた。

「……ひどい有り様にや」

翌朝、ベッドの惨状を見たサツキはすべてを悟つたかのようにポツリと呟いた。

「しゅごかつた」

「シルクと同じこと言うな、なのにや」

「でもしゅごかつた」

「……とりあえず、バルドに使つた薬、私にもよこすのにや」

その日の晩は、サツキの悲鳴のような叫び声が深夜まで響き渡つたとか。



ゲツは、深まつていくばかりの謎に頭を悩ませていた。

「やれやれ、私としたことが手掛かりのひとつつかめないとは、情けないねえ……」

バルドから渡された王門封じの聖遺物。そこに古代獣人語らしき文字を見つけたまではよかつた。しかし意味を解説するのは困難を極める。

古代獣人族は、獣王の登場よりもはるか前に絶滅したとされていて、現在の獣人にとって謎の種族なのだ。

「ひとつ確実に言えるのは、古代獣人族は魔力を使えたということだな」

「はるか昔、獣人族は魔法が使えた——」

その事実にサクヤは背筋が冷たくなる。

いわれのない中傷、差別、迫害。それらの多くは獣人が魔法が使えないことに起因していた。魔法が使えない代わりに、身体強化の『変生』^{へんせい}を使える事実が、獣人を人間とは異なる種族にさせたのである。

もし獣人が普通に魔法を使えば、たとえ人間との間に利害関係の対立^{たいりき}があったとしても、ここまでの差別はなかつたであろう。

先ごろ解放されたネド拉斯王国では、獣人の半数近くが命を落とした。エウロパ教の本場であるアンサラ^{アンサラ}ー王国で暮らしていた獣人にいたっては、ほぼ絶滅したに等しい。

かろうじて生き残っている獣人がいたとしても、奴隸^{どりい}か、それ以下の扱いを受けている可能性が

高かつた。

「いつからだ？ いつから我々は魔力を失つた？ どうして王門持ちは魔力を使える？」

王門持ちは先祖返りとでもいうのだろうか？

仮に遠い祖先が魔力を使えたとして、彼ら自身の作った遺物が王門の力を封じる理由はなんなのだろうか？

バルドやサツキがいないので実験は進んでいないが、聖遺物に魔力を封じる効果がないことははつきりしている。ガルトレイク王国の宫廷魔法士に何度も確認した結果、聖遺物は人間の魔法行使には一切影響を与えるなかつた。

さらに不可思議なのは、獣人特有の変生にも影響しないことであつた。

人間に獣人が唯一勝る、爆発的な身体能力向上。

それに影響を与えないにもかかわらず、王門だけはその力の大半を封じられてしまう。

そんなことがありうるのだろうか。

この聖遺物を作ったと思われる古代獣人族は、なんのために、獣人の希望であり王である王門を封じる道具を作らなければならなかつたのか。

「……悔しいが、まともに研究が進んだのはジーナの予測のおかげとはね」

現在は共闘関係にあるとはいえ、長年のライバルであつたジーナに助けられるのは決して気分の良いことではない。

たとえそれが、獣人のために必要だとわかつていても、である。

ジーナの予測とはすなわち、アンサラーの猛将ミハイル・カラシニコフから聞いた、彼の生い立ちにヒントがあった。

——王門持ちは過去に死にかけた経験を持つ、という事実である。

サツキが幼い日に生死の境を彷徨つたことを知るだけに、どうしてその発想を得られなかつたか、とサクヤは悔しくてならなかつた。

もつともジーナと、バルドやマゴット、そしてミハイルの話を聞いたからこそ、その結論に達することができた。サツキの例しか知らないサクヤには土台無理な話であつた。

サクヤが歴代の王門持つについて調べたところ、結果はすべてジーナの予測を裏づけていた。病や怪我、あるいは事故など要因の違いこそあれ、王門持ちは例外なく死にかけた経験がある。これまで誰も気づくことのなかつた共通点だつた。

「ま、共通するからといって、それが原因と決まつたわけでもないんだがね」

もちろん、ただ死にかけたというだけでは、王門の条件としては足りない。年に死にかける獣人などいくらでもいるだろう。

サクヤはそれ以上の追及を一旦諦めた。

聖遺物が古代獣人族の文明に関連している可能性が高い以上、古代獣人族の神話を読み解くところからアプローチしようと考えたのである。

「そのために、ジーナに下げたくもない頭を下げて、向こうの古い経典まで借りたんだから」

猫耳族も犬耳族も、獣神ゾラスによつて生み出された眷属けんぞくである、という認識は共通している。

これは狼耳や虎耳の少数民族も同様で、この大陸のすべての獣人は獣神によつて誕生した。

かつて獣神ゾラスは、ミルミナという世界を支配していたという。

そのミルミナが成熟し、もはや自分の手を離れたと判断したゾラスは新天地を求めて旅立つた。

——そして降り立つたのがこのアウレリア大陸。

新たな大地に祝福を授けたゾラスであるが、この世界に自分の眷属がいないことを寂しく思い、獣人族を生み出した。

彼らは、ミルミナでもつともゾラスに忠義の厚かつた眷属を模して創造されたという。

ゾラスの祝福を受けたアウレリア大陸は栄え、そのなかでも獣人族は中心的な役割を果たした。

未開であつた人間は獣人から知識を与えられ、耕作と文明を持てるようになつた。

飢えから解放され、支配できる土地が増えて豊かになると、やがて人間と獣人の間にいさかいが増え始める。

これを悲しんだ獣神ゾラスは、地上を離れ天界から見守ることにした……。

英雄の逸話いわや魔物との戦いなどのエピソードを除けば、だいたいの物語はこんなものだ。

不思議なことに、竜退治のような英雄寓話ぐわがあるにもかかわらず、神話のなかに獣王の記述は見当たらない。

それは獣神が直接統治していたから当然だ、というのが従来の解釈であつたが、人間にはきちんと王が現れている。

直接統治とはいえ、社会とは上下関係なしには動かない。その割には理屈に合わないほど、獣人の支配構造は不明なままであった。

そしてゾラスが天界へ去ったのち、獣人は数に勝る人間によって迫害され、現在に至る。

獣王が誕生し、獣人族の王国を打ち立てるのは、それから大分経つた後のことである。

「……ふむ」

獣神に仕える巫女としてあるまじきことかもしれないが、サクヤはゾラスが天界へ去つたことを、説話の一種であると考えていた。神は天から自分たちを見守るものであつて、実際に神が地上でその力を振るつていたとは信じていなかつた。

だが、古代獣人族が魔力を有していたのに現在の獣人族が魔力を使用できないことに、ゾラスが関係していた可能性は捨てきれない。

どうしてゾラスは天界へと去つたのか。

ゾラスによつて創造されたのが獣人族だけであることは何を意味しているのか。

「とるにたらぬ異端本と思つていたが……」

サクヤは装丁がボロボロに崩れた写本を手に取つて、いぶか驚しげに眉をひそめた。

『ゾラス降臨神話』

ふんしょ
焚書されるところをジーナの先祖が密かに隠し持つたというその異端本には、ゾラスは一人でなかつたと記されている。

ゾラスとは二百人ほどの集団だつた。彼らはミルミナという世界からやつてきた神であり、この大陸に文明と魔法をもたらした……。

そんな馬鹿な、と笑うことが今のサクヤにはできない。

魔力を持ち、魔法を使用していたと思われる古代獣人族の話と、一部とはいえ一致するからだ。『ではどうして古代獣人族は消えたのか？』 どうして彼らは獣人族の王門を封じる遺物を製作しなくてはならなかつたのか？

わからないうことが多すぎる。聖遺物の実験と並行して、これまで無視されてきた異端本の調査もしなくてはならないようだ。

膨大な作業量に思わずため息が漏れた。

「まったく厄介な仕事を押しつけてくれたもんだ。やっぱりあの女は大嫌いだよ！」



アンサラー王国宫廷は重苦しい空氣に包まれていた。

『あまねく光さす者』の称号を得て、自他ともに認める統一王朝の後継者となつた喜びもつかの間、

国際情勢はアンサラー王国にとつて不本意な方向へと進んでいた。

特に先ごろのネドラス王国失陥は、アンサラー王国の面子を叩きつぶした。

自らの孫にあたる衛星国すら守れない国という不名誉を押しつけられたも同然であるからだ。

「これ以上の醜態は許されぬぞ？」

不機嫌そうにアレクセイ三世は玉座から腹心たちを見下ろして言つた。

「敵を見損なつておりました。私の責任でございます」

「思いのほか教団の影響力が低下していただのが痛いですな」

国王の言葉に答えたのは、宰相ボリシヤコフ侯マラートと王太子ピョートルである。

特に『あまねく光さす者』の称号を獲得して、大陸に号令しようと画策したマラートの声は、明らかに精彩を欠いていた。

「内戦や戦役に教団がまったく仲介の役割を果たせなかつた。その影響がここにきて大きくなつてゐる。忌々しいことにな」

まだトリストヴィーの内戦が初期のころであれば、反応は違つていただろう。

ところが手をこまねき、十数年も見捨てていた教団と、海を越えて救いにきててくれたバルドとではありがたみが違いすぎる。

マウリシア王国とハウレリア王国の戦役にしても同じこと。エウロパ教団は戦争の終結になんら寄与していない。

もつともそれは、統一王朝の後継者候補である彼らの衰退を願つた、アンサラー王国の思惑が絡んでいたのである。

どんどん争つて自滅してくれるのが、アンサラー王国にとつてもつともありがたい。だから教団に裏から圧力をかけ、下手に手出しすることをやめさせた。

目論見はうまくいったようと思われた。

トリストヴィーはかつて強国であったのが嘘のようにおちぶれだし、マウリシア王国とハウレリア王国も、互いの軍事的緊張から外に目を向ける余裕が失われた。

その隙にアンサラー王国はまんまとネドラス王国やテネドラ公国を属国として、我が世の春を謳か歌かしたのだ。

まさかそれが、逆効果となつて跳ね返つてくるなど誰が予想するだらうか。

すべての起点はバルドにある。

バルドがいなければマウリシア王国とハウレリア王国の戦役はさらに長引いたであらうし、トリストヴィー公国が滅亡することもなかつた。

たつた一人の少年が、世界の仕組みごと変革しようとしている。

その事実がアレクセイには恐ろしかつた。

理解できることなら対抗策の打ちようがある。しかし理解の及ばぬことには対策が立てられない。

「——大三角より悲鳴が上がつておりますが」

「存亡の危機だ。商人なら金の使い時をわきまえろ、と言え」

アレクセイは先日、大三角へ大規模な軍事費の供出を命じていた。

こんな時があると思えばこそ、大三角——ヴィトゲンシュターン家、ツルゲーネフ家、ヴァニヤーチン家には優遇措置を講じてきただのである。

とはいえ、すでに多額の投資を行っていた大三角にとって、追加の軍事費供出はいかにも痛手であった。

ネド拉斯王国を失い、テネドラ公国が二派に分かれて混乱している今、彼らの財政事情は悪化の一途を辿っている。

そこに追い打ちをかけたのが、トリストヴィー王国と同盟諸国による為替レートの固定化である。ただでさえ金の過剰供給によって下落していたピヨートル金貨が、ほとんど銀貨と同一のレベルまで下がった。

これは、自国での銀の採掘量が少ないアンサラー王国にとつては大打撃となる。

通貨の下落は本来なら輸出の増大に繋がり、貿易額の増加を促すのだが、今は戦時である。むしろ強い国際通貨を背景に、安値で物資を買い占めたいところだ。

戦争は大量の物資を一方的に消費し、生産性はない。そんな大消費時代に通貨が下落するなど、商家にとつては悪夢でしかなかつた。

食糧や馬のような戦略物資が、自国から流出するのを容認するわけにはいかない。

しかし買い入れるには莫大な経費がかかる。

かろうじてアンサラー王国が肥沃な土地に恵まれ、食糧の輸入国ではなく輸出国であったから不満は最小限で済んでいるが、もし食糧危機でも発生したら暴動は不可避免だろう。

「教皇庁から返答は？」

「さすがに今回ばかりはあちらも肝をつぶしておるようで……ようやく秘匿情報の公開に応じました」

禁断の情報として、聖遺物の公開を制限していた教団も、ネド拉斯王国の失陥とネド拉斯王国へ派遣していた義勇軍の壊滅を前にしては黙っていることはできなかつた。

万が一アンサラー王国が敗北するようなことがあれば、もはやエウロパ教団の未来はない。

バルドに真っ向からの対立を選んだ教団は、アンサラー王国の勝利にベットするしか選択肢がなかつた。



「なんたることか！」

教皇も断腸の決断であつた。

一度流出した知識は、もう一度と後戻りすることはない。

立ち読みサンプル はここまで

火薬武器、そして銃砲の製造、その先にあるのは大量殺戮による火力戦争の時代である。かつてそれを危惧し、封印することを決めた歴代の教皇に対して、どれだけ詫びても詫び足らなかつた。

しかしあの獣の王、バルドはその悪魔武器の量産に成功しており、このまま受け身を続けていたら、教団側勢力の衰退は目に見えていた。

悪魔武器をこの世に蘇らせたバルドなど、千度睨われて地獄に落ちよ。

憤懣やるかたなく、教皇は拳を握り締める。

もはや誰にも止められない。

あの獣の王が勝つか、教団とアンサラー王国が勝つか。いずれにせよ大量の血が流れ、戦いの在り方も、心の在り方も変わっていくに違ひなかつた。

（私の知る世界、私の知る教義とは変わってしまった。誰もこんな変化など予想もしていなかつた）

各国が足並みを揃えてバルドに媚びを売る現状は、決してバルドの戦争の強さや利益供与だけではないと教皇は感じている。

なかでも大きいのは、このアウレリア大陸にも匹敵する巨大な大陸が南方に存在することを明らかにしたことだ。

現在南方貿易はサンファン王国が独占しているが、すでに南方から流入する目新しい物資の量は

かなりの数に上る。

サンファン王国に独占されている利益を求めて、順次各国が貿易ルートの開拓に参入していくのは明らかだつた。

「異なる習俗、異なる宗教、異なる肌、利益を目当てに簡単に尻尾を振るはなんと愚かな……」今は物珍しさが勝つていても、異文化との交流はいずれ変容を産む。

獣人に対する忌避感が薄れているのもそうした変容のひとつであろう。

庶民はともかく、絶対的な権威である宗教組織にとつて許容することのできない事態であつた。もはや教皇には、バルドがこのアウレリア大陸の平和も伝統もなにもかも壊してしまう破壊の悪魔としか思えなかつた。

現に、聖戦に賛同し力を尽くしてくれているのは、エウロパ教徒全体の三割にすぎない。

アンサラー王国側を除くトリストヴィー王国同盟諸国は、せいぜい消極的不服従を表明してくれればよいほうだ。

期待していたテロも反乱もなく、むしろ聖戦を発動しておきながら何の成果も挙がらないことに、失望した教徒だけが増えていく。

まさに悪循環であつた。

「勝利するためには……悪魔にこの大陸を渡さぬためには……禁忌に手を染めるのもやむを得ません。神よ、無力な我を許したものう」